

## 1911年の生田長江全訳『ツァラトゥストラ』と 森鷗外・魯迅の関係

小山 修一

### Die Vollübersetzung 『Zarathustra』 im Jahr 1911 durch Choko Ikuta in der Beziehung mit Ogai Mori und Lu Xun

Syuichi KOYAMA

#### I

今から100年前、1911年(明治44年)に、ニーチェの代表作 *Also Sprach Zarathustra* が、『ツァラトゥストラ』<sup>(1)</sup> というタイトルのもとの下に、生田長江の手によって全訳され世に出た。この全訳には森鷗外の「沈黙の塔」という小作品が序に代えて冠された。長江は翻訳を開始した当初、夏目漱石の指導を求め、のちに鷗外の指導を仰ぐようになったと言われている。「沈黙の塔」は当時の「大逆事件」と結びつけて理解されている。「沈黙の塔」に関して、加藤周一は『日本文学史序説(下巻)』<sup>(2)</sup>の中で「鷗外が政府の権力濫用を痛烈に批判した」と記している。また、「官僚(軍医総監)としての鷗外が公然と行ったもっとも勇敢で、もっとも明瞭な政策批判であった」とも称えている。

しかし、「沈黙の塔」が『ツァラトゥストラ』の序となる意味は、非常にアンビヴァレントである。たしかに、支援と庇護を求めて来た長江を鷗外がからだ身体を張って護り、内務省当局に対して睨みを利かせているのかもしれない。しかし、一方でまた、長江に対しても無言の睨みを利かせ、深入りはくれぐれも気をつけるがいいと強く戒めているのではないだろうか。鷗外が *Also Sprach Zarathustra* を深く理解していたとは言えない。ただ、鷗外が最もよく分かっていたことは、当局がこの書物を危険視するにちがいないということであった。ニーチェの代表作は1901年、熱い世の期待を浴びて以来、当局からは猜疑の眼を向けられていた。とりわけ〈序説1〉の *Untergang* をどう訳すかに、当局は異常なまでの関心を抱いていたと考えられる。というのも、ニーチェが飛躍的に論じられるきっかけを作った高山樗牛には、〈序説1〉を訳して発表した形跡がない<sup>(3)</sup>。

タブー おもんばか  
禁忌を慮ったのである。

生田長江以前には、*Untergang* は「還相回向」(登張竹風訳)とか「転滅」(桑木巖翼訳)とか「下山」(樋口竜峽訳)とか、あるいは「下向」(山口小太郎訳)などと訳されていた。しかし、長江の全訳を契機として、鷗外の権威の下に *Untergang* の訳語は「没落」へみに向かって軌道を敷かれていく。2011年の今日、たいていの翻訳が横並びに「没落」となっていることの種は、1911年の長江訳によって撒かれたのである。ただ、竹風だけは例外的に仏教趣味を貫き、「還相回向」<sup>(4)</sup>を昭和に入って「下化」<sup>(5)</sup>と変えた。いずれにせよ、「沈黙の塔」の無言の圧力は、決して小さくはなかったと言えよう。長江の「没落」という訳語を目にしたとき、大変に奇異の念を覚え、〈序説1〉を訳してみたいと思っていた人たちや全訳を志していた人たちまでもが、翻訳への情熱を急速に失っていったにちがいない。たぶん、多くの青年が当局の強い意図を感じたのであろう。1920年(大正9年)、『ニーチェのツァラトゥストラ解釋並びに批評』<sup>(6)</sup>を世に出した阿部次郎さえも、二部〈夜の歌〉<sup>(7)</sup>は訳し発表しているが、〈序説1〉の訳を発表した形跡がない。

鷗外は「没落」に“お墨付き”を与えてしまったことに、何ら良心の呵責を持っていなかったと思われる。むしろ、『ツァラトゥストラ』が禁書となるのを防いでやったという気持ちのほうが、強かったのではないだろうか。しかし、ツァラトゥストラ言わく、「語られざる真実はすべて毒となる」<sup>(8)</sup>である。鷗外は毒の種を撒いたことに気づいていなかった。

「没落」という訳語が毒の花を咲かせるのは、昭和に入り、時代が軍国主義の軌道をひた走り、まさに没落に向かって突進していた頃である。

1935年（昭和10年）、思想統制の下<sup>もと</sup>に出版された生田長江訳『ツァラトゥストラ』<sup>(9)</sup>全訳改訂版の序にやや抑え気味に記してある。「極々最近に及んで、学界思想界に於ける一般的風潮に一転化の兆しが見えると共に少なくとも上層読書界は俄然ニーチェとニーチェ的なものへの興味を取り返し始めたかのような感じがある」。長江は昭和のニーチェ熱再来を決して手離しては喜んでいなかった。否、むしろ、深い失望を押し隠しているのではないかと思われるふしがある。というのも、過酷な事前検閲を受けたに違いないからである。彼は同じ序の中で記している、「従前の総ての訳本に重要な多くの改訂修正が施され、また各巻末毎に適切な解題が添えられねばならなかった。そして最後には、全集の総てに対する十分に細密な索引が附加されなければならなかった」。

長江は19歳だった1901年から1910年（大逆事件）に到る、明治のニーチェ熱を肌で感じてきた。深く読みもしないで（中には全く読みもしないで）、ニーチェをしゃあしゃあと語る論客が多い中で、長江ほど熱心に原典と格闘しながらニーチェを理解しようとした学究はいなかった。その並はずれた気まじめさゆえに、長江はUntergangとその動詞形であるUntergehenの訳語をめぐって大いに煩悶した。彼は15歳頃から明治元年訳聖書に親しみ、マルティン・ルッターへの趣向が身についていた。そのルッター的なキリスト教趣味と波長の合う表現が、冒頭〈序説1〉から飛び込んできた。第八連である。

Ich muss, gleich dir, untergehen, wie die Menschen es nennen, zu denen ich hinab will.  
(A)

長江にとって（ニーチェにとっても同様だが）、die Menschenとはキリスト教徒にほかならなかった。するとuntergehenとは、キリスト教徒が最も崇め敬う行為、具体的に言うと、迫害と殉難を覚悟して敢えて人間界に降り立った行為、つまり、イエス・キリストの降臨以外にはありえない。彼はそう考えたのではないだろうか。しかし、それゆえにこそ、長江は自らの思いのままに表現の自由を貫徹するか、もしくは悪魔に魂

を売り渡すかというファウスト的な選択に苦悶した。というのも「降臨」という言葉は、寺社局等が発言力のある官公庁として君臨し、内務省が厳しく思想犯に目を光らせていた当時においては、かつて中国で皇帝が庶民に黄色を使うのを禁じたように、極めて排他的・独占的概念であった。つまり、天照大神の孫である邇邇芸命の天孫降臨以外の意味で「降臨」という言葉を使用すれば、不敬罪の嫌疑を受ける恐れがあった。悪くすると拷問され、背後関係までも追及される。そうすれば、夏目漱石や東大哲学科の恩師にまで嫌疑が及ぶかもしれない。一人で悩み苦しんだ挙句、長江は森鷗外の門を叩いた。

鷗外は山形有朋などの長州軍閥に連なる陸軍中將、庇護者としては申し分ない。むろん、長江の相談を受けた鷗外も事の重大さを分かっていた。鷗外がニーチェをもっと深く理解していたならば、長江と共にファウスト的な苦悩を分かち合っていたであろう。だが、『ファウスト』の名訳者でもある鷗外は、ニーチェと心中するつもりは毛頭なかった。彼にとって最大の問題は、皇統神話の禁忌に触れないUntergangの訳語を見出してやることだったにちがいない。文豪森鷗外といえども、不敬罪をものともせずと言論の自由を貫くことはできなかったのである。だが、鷗外は権力の側にいた。だから当局の意向を確かめることができた。たぶん、鷗外と当局の間で、事前検閲に近い接渉が幾度か持たれたと思われる。とはいえ、「降臨」に取って代わる言葉を見つけるのは至難である。次善の言葉さえ見つからない。こういった状況の下では、検閲官がニーチェの詩魂を葬り去ろうと思えば、いとも簡単である。そもそも日本語の没落には、ドイツ語のUntergangのような星辰<sup>せいしん</sup>の下降という元意が全く欠けている。だから星辰の下降という元意を無視して、第二番目の訳例である「没落」と日本語の没落を横並びにすればいい。それによって、ニーチェの誌魂は葬り去られてしまう。実際そうやって「降臨」とは真逆の「没落」が、Untergangの訳語となったのはまちがいない。

1911年の全訳から登場することになった「没落」を見て、長江は複雑な思いを嘔みしめたことだろう。しかし、彼はまだ29歳だった。いつか

もっと自由な時代になれば、きっと考えているとおりのことを表現できる。そのときに訳を改良すればいいのだと自分に言い聴かせたのではないだろうか。ところが、自由な時代はやって来なかった。思想統制はひどくなるばかりだった。意外にも大正年間に、ニーチェ研究者たちが徐々に「没落」を受け入れた。何でもありの不条理、奇異を奇異として異常を異常として感じない狂気の時代が始まろうとしていた。「没落」はその先駆けだったのである。当局はほくそ笑んだ。没落への道が地ならしされていく。あとは軌道を敷いて、獣に戻りたがっている“畜群人間”どもを軍国主義の列車に乗せて突進あるのみ。そのためには、普く多くのインテリ青年たちにも「没落」の毒杯を仰がせ酔っ払わせるがいい！ こういうメフィスト的な目論見の下に、昭和のニーチェ熱が仕掛けられたのではないだろうか。当局はニーチェ研究者よりも遙かにニーチェを利用する術を知っていた。

むしろ、若手のニーチェ研究者たちのほうが当局に摩り寄り、自ら知的醜態者となった。そして青年たちの間に知的醜態を煽り、獣性に火を付け、死への憧れをかきたてた。1935年の全訳索引で、長江は、「没落」を23回使っていることを報告させられた。最早、「没落」は毒の根をしっかりと張りつつあった。1911年が勝負の時だったのだ。たとえ禁書となるとも生命懸けで「降臨」を貫徹すべきであった。それこそ、狂気が真実となる唯一の方途だった。本物のニーチェ主義だった。しかし、失われた時は戻らない。翌1936年、最愛の『ツァラトゥストラ』が脱け殻となったのを看取ったのち、生田長江は失意のうちに亡くなった。第二次世界大戦後、日本のニーチェ研究者たちの間で、最初は擦り替えられた“赤ん坊”にすぎなかった「没落」は公然たるテルミノロジー（学術用語）となった。

## II

長江が亡くなった1936年はまた、魯迅が亡くなった年でもあった。長江1882年生まれ、魯迅1881年生まれ。全くの同時代人である。魯迅が留学のため来日したのは、1902年（明治35年）3月、帰国したのは1909年8月である。その間、

1904年9月に仙台医専入学、1906年3月に幻灯事件がもとで退学、文学を志して東京に戻った。二人の間に何らかの出会いがあったならば、1906年3月から1909年8月までの3年数ヶ月であっただろう。だが、今のところ、そのような形跡はない。

とはいえ、二人が共に明治末における、ニーチェへの熱い期待を肌で感じたのは確かである。魯迅はとりわけ、*Also Sprach Zarathustra*に強い関心を抱いていた。どんな翻訳が生まれるか注意を傾けていたにちがいない。日本人の誰かが立派な翻訳をして、魯迅がそれを模範とすることができれば、中国人の友人知人に逸早く知らせてやりたいと思っていたことだろう。だが、全訳がなかなか生まれず、部分訳だけが美味しい所だけを食い散らすように現れた。冒頭の〈序説1〉をどこか避けたがるような微妙な雰囲気、魯迅は察知していたのではないだろうか。結局、魯迅が滞在している間に、〈序説1〉の翻訳は数えるほどしか発表されなかった。その中からIで引用した原文の〈序説1〉第八連をどのように訳しているか三人について見てみよう（因みに八連のUntergehenの訳が最終連のUntergangの訳に結実する）。まずは樋口竜峽の訳である。

人は汝を呼んで没すと云ふ。我れまた汝のごとく、没して人圓に趣かんことを欲す。

これは1906年（明治39年）3月、『碧潮』（嵩山房）に収録されている。元来、八連は難解ではある。それにしても、ひどい訳例の見本としか言いようがない。「汝」とは太陽の人称代名詞であり、太陽が「没す」と呼ばれる別名をもっているわけがないからだ。因みに樋口竜峽は1875年生まれ、東京帝大卒、のちに衆議院議員（当選5回）になる人物である。真理の探究とは、全く別の思惑があったとしか思えない。

次に登張竹風の訳である。竹風の最初の〈序説〉訳は1907年『やまと新聞』にて連載された。ひょっとしたら、まだ日本にいた魯迅の目に触れたかもしれない。竹風は1921年（大正10年）にも〈序説〉訳を『如是經序品 光炎菩薩大師子吼經』という譯註及評論書として上梓している。そ

して、1935年には『如是説法ツァラトゥストラ』という全訳を長江に続いて世に出した。その全訳の中から取り挙げてみたい。

私は、お前と同じように沈みいかねばならない。沈み行くとは人間の言葉だ、私はその人間のところへ下り行こう。

「沈み行くとは人間の言葉だ」とは何とも間延びした表現である。余りにも当たり前のことは詩文にならないどころか、普通の文にもならない。猿か何かしゃべっているのなら話は別だが。たんに「沈み行く」ではなく、私が太陽のように沈み行くことを、私の行く手にいる人間たちが何と命名しているかが問題になっているのだ。また、ここの「人間」とは一般的でも抽象的でもない。ニーチェを生んだ社会の人間たち、「ツァラトゥストラ」を生んだ社会の人間たちを具体的に思い浮かべない限り、「命名している (nennen)」が何のことも想像できなくなる。

竜峡にも竹風にも、むろんドイツ語力の不足はあるが、何よりも日本語が話しにならない。だから、ここではドイツ語のことには一切触れないことにする。竜峡が最終連を「下山」と訳そうが、竹風が「還相回向」とか「下化」などと訳そうが、二人とも八連をこんなに惨めに訳しているのでは、八連と最終連との間には全く脈絡がないということになる。竹風の1935年訳はあれども、魯迅が見たかもしれない1907年訳よりはましなのかもしれぬ。いずれにしろ、魯迅が二人の訳を見たならば、言葉を失ったことは疑いなしである。事実、魯迅は何も語ってはいない。

第三に挙げるのは山口小太郎の訳である。西尾幹二博士によると、山口小太郎の〈序説〉訳連載は、長江の全訳より少し前に始まっていたらしい。<sup>(10)</sup>その連載が単行本<sup>(11)</sup>となったのは1916年(大正5年)である。当然ながら、連載中に、鷗外の「沈黙の塔」を戴いた、長江の全訳が現れる。ゆえに単行本の中に何らかの微調整の跡が伺えるかもしれない。

予は今人實に降らんと欲する故に所謂下向没落するものなり。

一見、リズムカルな古文調である。しかし、「今」に相当する語が原文にはない。gleich(～のように)のことだろうか。であれば、完全な誤訳である。また、「人實に降らんと欲する故に」も原文の意を無視している。因みに最終連は、「ツァラトゥストラの下向始まりぬ」となっている。八連だけに「没落」が付いているのは不自然である。「下向」だけで高い所から低い所へ向かうという意味を持っているからだ。この取って付けたような不自然さは、鷗外の「沈黙の塔」のせいではないだろうか。この訳文には意味もなければ訳もない。

ところで、客観的に見て山口小太郎は魯迅と縁を結ぶ可能性の最も高かった人物である。というのも、魯迅は1906年3月東京に戻ったのち、ドイツ語学校に籍を置いていた。そのドイツ語学校でドイツ語を教えていたのが、山口小太郎である。ニーチェの講述もしていた可能性が高い。にもかかわらず、仙台医専の藤野先生とは異なり、魯迅の口から山口のニーチェ講述を聴いたという話もなければ、ドイツ語を教わったという話も一切ない。友人など周辺の証言からは、ほとんど授業には出席していなかったということしか伝わってこない。

たしかに、一見不思議な気がする。〈序説1〉の八連訳では成功しなかった山口小太郎といえども東京外国語学校を卒業し、ドイツに2年留学し、(北岡正子氏の「独逸語専修学校で学んだ魯迅」<sup>(12)</sup>に依ると)東京帝大にも在籍したキャリアを積み重ねてきた。1867年生まれ、脂の乗り切った気鋭のドイツ語教師である。何が噛み合わなかったのか。どうして教師と留学生は心の擦れ違いを想像させるのだろうか。

しかし、1906年3月以降の魯迅について、われわれはしばしば誤解しているのではないだろうか。仙台医専時代のドイツ語成績の記録から見て、魯迅のドイツ語力はそれほど芳しいものではなかったと言う人が少なくない。けれども、アインシュタインにせよ、エジソンにせよ、学校の成績記録からは伺い知ることのできないのが人間に秘められている可能性である。北岡正子氏に依ると、すでに南京の磁務路学塾時代から、魯迅は

ドイツ語を学んでいたらしい。<sup>(13)</sup>1902年4月に入学した弘文学院においても、日本語と並行してドイツ語の研鑽<sup>けんさん</sup>を続けていたとしても不思議ではない。あるいは悪戦苦闘しながら、ニーチェの代表作 *Also Sprach Zarathustra* を原書で読んでいたかもしれない。筆者は大いにありうる話だと思ふ。

しかし、彼は留学生としてこの書をおおびらに読み議論し合うことの危うさを分かっていたのではないだろうか。“身元引受人”にも等しい嘉納治五郎は、ニーチェの「超人」論を好んで披瀝<sup>ひれき</sup>していて当局から睨<sup>にら</sup>まれた登張竹風を、東京高等師範学校から一時退職に追い込んだ人物である。<sup>(14)</sup>だから仙台医専時代にも、人知れず、だが心燃やしてニーチェやハイネを読んでいたのではないだろうか。つまり、来日して以来欠かさず、魯迅は文学に親しんでいた。幻灯事件が無くて、遅かれ早かれ、医学から文学へ転身<sup>てんしん</sup>する運命<sup>きりだめ</sup>だったのである。要するに、ドイツ語の医学専門用語や医事表現には、詩心を熱くかき立てるものがなかった。その結果、だからドイツ語が余り出来なかったらしいと誤解されているのだ。

筆者は、1906年3月以降は、魯迅が文学に親しむことから一気に文学を究める段階に入ってしまったと考えている。でなければ、青年魯迅に文学で民族を救おうなどという価値判断ができるわけがない。また、むしろ、山口小太郎のほうが魯迅から学ぶべきだったのではないかと思いたくなるふしがある。それというのも、翌1907年に上梓された『文化偏至論』と『摩羅詩力説』は、ニーチェの強い影響力の下に書かれたのは明らかである。とりわけ『摩羅詩力説』は、ニーチェを具現化した不滅の詩学と見なすことができよう。とはいえ、39歳の教師が25歳の留学生から学ぶという発想は、容易には生まれえない。ましてや、明治末のニーチェ熱の中に、幾ばくかの戦勝気分や傲りが混じっている場合には、なおさらである。まさに、こここのところの目に見えない小さな隙間こそが、ニーチェを富国強兵や軍国主義に添って読み解いていくか、それとも軍国主義に対する抵抗として読み解いていくかという大きな裂け目へと通じていく。戦勝気分や傲りは、自らを映し出す鏡を持たない。それらを映し出すのは、

卑屈にならず正直に真実を見据<sup>す</sup>える留学生の瞳ではないだろうか。

### III

魯迅は1909年8月、中国に戻ってきてからも *Also Sprach Zarathustra* がどのように翻訳されているか、とりわけ腫れ物に触<sup>さわ</sup>るかのように取り扱われている〈序説1〉がどう訳されるか深い関心を抱いていた。そして、1911年、生田長江の全訳『ツァラトゥストラ』が世に出たとき、魯迅は何を思っただろうか。「没落」という訳語にどういう感慨を抱いただろうか。「これはひどい！」というのが率直な受け止め方だったと思われる。というのも、「没落」とは中国人にとって常に具体的に現実的なものであり、のちに日本人の知識層が毒に染められたように、決して観念的なものとは成り得ないからである。とはいえ、日本趣味に傾きがちな、日本語のできる中国人青年たちが「没落」の毒に染まらないとはいえない。魯迅は、適当な時期に国の内外に向け、自らの翻訳を通して〈序説〉の正しい意味を伝えねばならぬと思った。そして、『狂人日記』によって成功を博し、多くの読者の心を掴<sup>つか</sup>んでいた1920年9月、魯迅は、満を持していたかのように、「察拉图斯忒<sup>ツァラトゥス</sup>の序言」の訳載を『新潮』において行った。〈序説1〉の八連訳(4人目)を見てみよう。

我<sup>われ</sup>、像你、下去了、就如这些人所称的、我要下到这些里去。<sup>(15)</sup>

筆者はドイツ語を生業<sup>なりわい</sup>としているが、中国語は堪能ではない。しかし、それでも、今までの和訳より段違いに勝れていると分かる。

まず、第一に、原文に即して類似関係を示す「像」と「如」という二つの機能がある。これが今までの和訳では一つか、全くないかだった。また、原文の *die Menschen* の個性が「这些人」と明確にされている。さらに最も勝れている点は、原文の *es* を「所」でみごとに表現していることである。語句の間合い、文章の形式美にも、文豪ならではのものがあるのは誰の目にも明らかではないだろうか。因みに最終連の *Untergang* の訳は「<sup>シャチエイ</sup>下<sup>さ</sup>去」である。

その後中国では、1931年5月に楚冬南の全訳『査拉斯冬拉如是説』<sup>(16)</sup>が世に出る。読み方がツァラストラとしかならないのが気になるが、「黄金の星」と「黄金星」くらいの違いしかないと思われる。そんなことよりも、この年にすでに全訳が出たというのは刮目に値する。日本の全訳は、まだ、長江訳だけだったからである。楚冬南と魯迅との間にどのような脈絡があるのか、不勉強で定かではない。とはいえ、魯迅の〈序説〉訳を読んで触発された可能性は非常に高いと言えよう。というのも、楚冬南は最終連ではUntergangを「下山」と訳しているが、八連ではuntergehenを「下去」と訳している。いずれにせよ、魯迅が1920年9月に〈序説〉訳を国内外に知らしめた布石によって、中国人が「没落」の毒に染まらずに済んだといえよう。<sup>(B)</sup>

ところで、福建教育出版による『魯迅訳文全集』第二巻の中に、森鷗外の作品が二点だけ翻訳されている。『あそび』と『沈黙の塔』<sup>(17)</sup>である。両作品は全く無関係のように思える。しかし、「遊び(Spiel)」とは、〈三つの変化〉に照らすとツァラトゥストラ的な概念である。一方、作家紹介の箇所では魯迅は「沈黙の塔」が生田長江訳全訳『ツァラトゥストラ』の序に代わるものとして、その存在意義をもつことを強調しているように思える。<sup>(18)</sup>とすると、日本人には比較的なじみが薄く、何の関係もない同士であるような「あそび」と「沈黙の塔」とが、意外にも魯迅の眼には鷗外を象徴するものとして浮かび上がってくる。つまり、鷗外はアンビヴァレントで危険な遊びをしている。「沈黙の塔」によって長江を守るべく当局に対して睨みをきかせつつ、同時に長江に対しても深入りはするなと睨みをきかせている。だが、その危険な遊びから「没落」が生まれたのではなかったか。ニーチェの詩魂が毒杯に変えられたのではなかったか。当局は「沈黙の塔」のかどで、鷗外を逮捕することはなかった。しかし、十分すぎるほどの実を取った。『ファウスト』の名訳者は、メフィストにしてやられたのである。

鷗外の「あそび」と「沈黙の塔」が魯迅によって中国語に翻訳され商務印書館から発表されたのは、1923年である。鷗外は1922年に亡くなっていた。だから、この翻訳発表は、魯迅から長江へ

のある種のシグナル、言わば「没落」という訳をあなたの信じるままに改めたらいかがですかという思いを伝えていたのではないだろうか。というのも、1926年、魯迅は《莽原》で中沢臨川・生田長江共訳「ロマン・ロランの真勇主義」の中国語訳「羅漫羅蘭の真勇主義」<sup>(19)</sup>を発表したからである。これは「あなたが訳した論文の如く勇気を振り絞って『没落』という訳語を一日も早く改めなさい」という強いメッセージである。この頃、日本のインテリ層は「没落」に対して無感覚になっていた。とりわけ、専門家にその傾向が強かった。魯迅は毒が回り始めた危険な兆候を感じていたのだろう。

そして、数年後、追いつめられた日本のインテリは、デカタンの魔酒となった「没落」を激しく渴望する。すでに狂気に陥ってしまった日本は、どんなシグナルもメッセージも通じなかった。魯迅は自らが「没落」を本来の意味で使って後世に範を示すしかなかった。『三閑集』に収められている1928年の通信には「没落」<sup>(20)</sup>というまさに括弧つきの言葉(増田渉訳)が登場する。また1933年の『准風月談』におさめられている「中国文壇の悲観」にも没落という言葉が二度<sup>(21)</sup>出てくる。さらには、1934年の『花辺文学』に到っては、「洋服の没落」<sup>(22)</sup>、「誰が没落するのか」<sup>(23)</sup>という、没落をタイトルに混じえた“雑文”が見られる。いずれの「没落」も文句なしの本来の意味で使われている。

#### IV

平均的な学生にドイツ語文を訳させると、取りあえず羅列してある訳例の中から最初のものを選んで訳すことが多い。どの教師も体験することである。ところが、最初の訳例と二番目の訳例が全く正反対のことがある。そんな場合には、トンチンカンな訳になってしまう。「没落」という訳語が市場で勝利を収め、日本の学術用語として君臨してきた背景はそんなものである。ただ違いは、「没落」が二番目の訳例だったということである。だが、学生がたいてい最初の訳例を選ぶのに、わざわざ二番目の訳例を選んだというのは、やはり未熟者のやることではない。トンチンカンな訳にして訳の分からないものにしてしまおうという意

図が働いたのである。

これからは、言語自体に即した文法とも照らし合わせつつ、「没落」が意外にも深刻な問題を孕んでいることを突き止めてみたい。独々辞典や独和辞典を見ると、Untergangの第一の意味は太陽など星辰の下降である。第二の意味が、破滅、没落、落魄、失敗。第三が沈没、第四が死（消滅）である。独和辞典によっては「墮落」が付け加わったり、「死」があるかないか、また第三の沈没が第二の意味と入れ替わることがある。これは第二の意味以下が、厳密には意味ではなく訳例だからである。意味と訳例は文学的になるほどに異なってくる。意味の丘から訳例という裾野が見えてくる。だから意味を掴まねばならない。ところが、*Also Sprach Zarathustra*の場合、意味の高山はあっても意味の丘はない。そこで訳あって意味なしということが瀬繁に起きる。そうならないためには解釈と創造が求められる。それはどういうことか。言わく「最も高いものは、最も深い海の底より隆起して、その頂を天にむって築き上げなければならぬ。—<sup>(24)</sup>。意味を魂の底で受け止め、精神の頂めざして練り上げていかねばならぬ。これこそが、ニーチェの遠近法に近づく解釈と創造ということではないだろうか。

そういうわけで、独和辞典などの訳例がすべてなどとはとても言えない。にもかかわらず時には間違ったシグナルが出されている。たとえば、Untergangの第二の意味である破滅、没落、零落、失敗が比喩であると教示している辞典が少なくない。しかし、これらは厳密には抽象名詞ではないだろうか。なぜならば、真実の比喩は第一の意味と第二の意味との間で、すっぱりと抜け落ちていくからである。つまり、太陽の下降という具体的な事実があれば、太陽のように倦まずたゆまず分け隔てなく人を慈しみ、知恵を分かち与え、喜び勇んで己を捧げ尽くす、最も正直な人間の生き方があるのではないか。それこそ、ツァラトゥストラが「おまえのように gleich dir」即ち太陽のようにと語っていることにほかならぬ。古代ギリシャ人は、輝くばかりに美しい青年の魂と肉体を太陽になぞらえた。太陽神アポロンである。アポロンは白銀の弓をもつ戦神であったし、堅琴を上手に奏でる詩神でもあった。青年たちはアポロ

ンのように成りたいと願ったし、成ることができると夢みた。ここに開けてくるのは、紛れもなく豊穡なギリシャ神話の世界である。そしてまた、精神の不滅を太陽の不滅になぞらえたゲーテの世界でもある。

こうした第一の意味から広がる比喩の孕む希望と夢、愛と勇氣、不屈の意志と憧れ、そして健やかさと志操、これらすべてが消え失せてしまった空洞、それがまさに第二の意味の「没落」という抽象名詞ではないか。だから、この場合の抽象とは比喩の退化もしくは死であり、比喩と抽象は全く正反対の意味を持つことになる。

そして、このような空洞となった抽象名詞には、たいてい魔物が棲みついているということ忘れてはならない。一方、比喩がさらなる比喩として進化し、崇敬の対象となる行動規範、つまり精神文化を示す抽象名詞となることがある。それがまさに「降臨」ということではないだろうか。

今、述べた比喩がさらなる比喩として進化したということは、原文の文法的な構造において実現されている。翻訳は、それを無視してなされてはならない。完全な誤訳となる。要するに、gleichと wie・・・es という二つの比喩・類似関係を示す表現を必ず翻訳の上に反映しなければならぬということである。それでは一貫して比較検討している〈序説1〉第八連を原文と突き合わせて訳してみることにする。

Ich muss, gleich dir, u n t e r g e h e n, wie die Menschen es nennen, zu denen ich hinab will. (再掲)

おまえのように、わたしは降っていかねばならぬ。わたしの行動と同じようなことを、わたしの行手にいる人間たちは降臨と命名している。(小山修一訳『黄金の星はこう語った』上巻 2011年2月鳥影社)

いろんな訳を見ると、「人間たち die Menschen」の意味を漠然としか掴んでいない。この文の中だけで理解すると、歴史的な背景を欠いた非常に抽象的な人間像にならざるを得ない。だが、それでは「命名する nennen」という行為が脈絡のないものとなる（脈絡のなさを好むなら

話は別だが)。「命名する」とは集団の結束に資する伝統文化的な行為であると見なして、どこか間違っているだろうか。決して間違っていない。それどころか、この理解を踏まえておかねば、「人間たち」が宙を彷徨う。それほど「人間たち」は重要なのである。なぜか。歴史観と世界観の決定者だからである。イエス・キリストは確かに殉難を覚悟して、聞く耳を持たぬ者たちの許へと降っていった。しかし、己の信じるままに生き抜いたとはいえ、イエス自身が自分の短い一生を客観的に評価し命名したわけではない。彼が太陽のように分け隔てなく人を慈しみながらも、殉教者となって刑死したのち、聞く耳をも持たなかった人間たちが徐々に目覚め、イエス・キリストの一生を神の子の降臨と客観的に評価し命名したのではなかったか。ツァラトゥストラは自らを太陽になぞらえ、イエス・キリストにもなぞらえつつ、イエス・キリストを超えようとした。このディオニュソスの精神の輪郭が最初に見えてくれば、「没落」などと命名することに何の意味があるのか余りにも明らかである。

それでは〈序説1〉第八連訳の最後の五つをここで見てみよう。まずは、最初の全訳者生田長江訳、「私は汝の如く没落せざるべからず。我が降り行かむとする人々、これを名けて没落と云ふ。」<sup>(25)</sup>

二番目は戦時中に翻訳していた竹山道雄訳

「われもまた、なんじの如くに降りゆかねばならぬ。これをしも、いまわれがその所へ降り行かんとする人々、名づけて没落と呼ぶ。」<sup>(26)</sup>

三番目は1967年に登場した水上英廣訳

「わたしも、あなたのように没落しなければならぬ。わたしがいまからそこへ下りて行こうとする人間たちが言う没落を、果たさなければならぬ」<sup>(27)</sup>

四番目は1973年に登場した手塚富雄訳

「わたしも、おまえのように下りてゆかねばならぬ。わたしが下りて訪れようとする人間たちが没落と呼ぶもの、それをしなくてはならぬ」<sup>(28)</sup>

五番目は1982年に登場した蘭田宗人訳

「わたしはおん身と同じように、わたしがこれから降りて行こうとしている人間たちの許で言う、

没落を遂げねばならない。」<sup>(29)</sup>

生田訳と水上訳と蘭田訳は、太陽の下降までも「没落」としている点において共通している。一方、竹山訳と手塚訳は、太陽のような生き方のみを「没落」としている。後者のほうが少しはましに見えるが、wie・・・esという準関係代名詞を定関係代名詞のように訳していることについては、前者と全く同一である。五つの訳は、いずれも誤訳である。なぜならば、先にも同様のことを述べたとおり、比喩・類似関係を示す準関係代名詞は、翻訳の上に必ず反映されねばならぬからである。

① 太陽と②太陽のような生き方と③(俗)世間が太陽のような生き方について命名している呼称の三つは、比喩・類似関係でむすばれている。三つを結ぶために gleich と wie・・・es という文法がある。それ即して訳すと「おまえのように、わたしは降っていかねばならぬ。わたしの行動と同じようなことを、わたしの行手にいる人間たちは降臨と呼んでいる。(再掲)」となる。これで、三者が原文のままに類似関係になる。①と②と③をあたかも定関係代名詞があるかのように同一関係で結ぶのは土台無理だし、②と③だけを同じやり方で結ぶのも無理なのである。この100年、無理が通って道理が見えなくなってしまった。語られざる真実が毒とまらないわけがない。

生田長江をはじめとする五人の先達の訳が、こんなふうになるのは、「人間たち die Menschen」の拠って立つ歴史的背景を全く無視しているか、あるいは意図的に排除しているからである。そのうえで、この本の中だけにしか通用しない「没落」という贗金が、何の脈絡もなしに突然顕れる。しかも、その贗金である「没落」に合わせて、太陽のような生き方も、そして黄金の夕日までも一本の線で収斂させようとするれば、比喩・類似関係を示す準関係代名詞どおりに訳していたのでは辻褄が合わなくなる。そこで、あたかも定関係代名詞が存在するかのように訳す。言わく「わかっていないのに、わかったふりをして語る者こそ、まずもって正真正銘の嘘つきである」(C)。「人間たち」について分かったふりをするという嘘をつくために、「没落」という嘘を思いつき、さらに二つの嘘を活かすために定関係代名

詞があたかも存在するかのようには訳すという嘘をつく。嘘の悪循環が後世に毒を撒き散らさないわけがあるか。

それにしても、1911年の長江訳から1982年の藪田訳まで実質的には何も進化していない。長江訳よりくどくなっているだけである。誤訳は誤訳として、長江訳のほうが簡潔なだけに少しはましではないだろうか。最も理解に苦しむのが、竹山道雄・手塚富雄・氷上英廣・藪田宗人という高名なドイツ文学のリーダーたちが、敢えて文法をねじ曲げてまで「没落」に権威を与えようとしていることである。自分を欺き、他人を欺くことにはならないのか。ひょっとしたら、かつて検閲は訳文にまで介入し指示したのかも知れない。そのことを、この四人は先輩たちから密かに伝え聞いていたのだろう。森鷗外の「沈黙の塔」の呪いが、かくも長く続くとは驚きである。

高名なリーダーたちが、かくも横並びであれば、後輩たちも追認せざるをえない事情があるかもしれない。しかし、「没落」についての註釈や解釈が、読み手の魂に届くことは決してない。そもそも手塚訳の註からして分かりづらい。「(没落は) ツァラトゥストラにとっては、人間の世界へくだって行って、自分をかえりみず、惜しみなく自分を与え尽くすという意味をもっている。」<sup>(30)</sup>とある。Untergangの解釈としては、十分に当を得ている。しかし、それがどうして一書にしか通用しない「没落」なのか。なぜ「没落」という訳語が最もふさわしいのか全く分からない。別次元の問題なのだ。『ニーチェ事典』の中で大石紀一郎は述べている。「ツァラトゥストラの没落は、すぐれた認識を得た人間が自らの身を危うくしてもそれを伝達しようとする伝道者的な姿勢の表現云々」と。<sup>(31)</sup>これは手塚訳註と同じように、なぜ伝道者のような生き方をする人が、遊蕩で全財産を失う人にもあてはまる没落によって冒瀆されねばならないのかという問いに答えねばならない。また吉沢伝三郎は言っている、「没落は、差し当たって、自己の孤独の否定という意味での自己否定である。しかし、この自己否定の極に予想されているものは、いずれかといえば、悲劇であるよりも祝福であり云々」<sup>(32)</sup>と。流石に哲学出身なので理屈っぽい。短い一代限りの人生

で、全財産を失って没落したのち、祝福に達することが、自己否定の極で予想されているのだろうか。その予想は競馬の予想のように外れることはないだろうか。

結局、どんなに言いつくろっていても、一書にしか通用しない「没落」、専門家にしか分からない「没落」には、うろんな感じがつきまとう。自分自身の魂の底で受け止め、真剣に一人で考え抜いたのだろうか。ほんとうに「没落」という訳語が最もふさわしいと自分自身で信じているのだろうか。先輩からの受け売りではないのか。「没落」に何の疑念も持たないのは「善人」ではないだろうか。不審の念は次から次に湧いてくる。むしろ、大石や吉沢の言っている「伝道者的な」とか「祝福」などという言葉のほうが、葬られていた真実を垣間見せてくれるような気がしてならない。そんなキリスト教的な言葉から、生田長江のうめき声が筆者には聞こえてくる。〈序説1〉において、ルッターの世界を実現できなかったことについて、長江の無念の思いはとてつもなく大きい。1935年版全訳の序の<sup>(33)</sup>冒頭で、彼は後世に向けて精一杯の告発をしている。

ニーチェは二三十年以前にその生国ドイツに於いて一度経験した所のものを、この日本へ渡って来てから再びまた経験しなければならなかった。即ちその太陽は地平線を出外れた当座こそ、いささかその朝らしき新鮮な光を地上に浴びせかける事が出来たばかりで、やがて間も無く難解や無理解や誤解の扶霧に依って遮られ始め、遂に大空一杯に拡がる閑却と黙殺との暗雲に全く包み隠されて了い、綺麗に抹殺されて了った。(1935・4・5)

この冒頭部だけが際だって文学的である。ニーチェを太陽にたとえている。ディオニュソス的にしてアポロンのという意味か。後半部分は、なぜか「沈黙の塔」の鴉の群れを彷彿とさせる。抹殺された太陽とは、ニーチェという太陽を忠実に伝えるはずの翻訳だった。言わく「初子として生まれた者は、いつも犠牲に捧げられる」<sup>(34)</sup>。長江が実現したいと願っていた翻訳は「初子」だった。だから犠牲に捧げられ「抹殺」されてしまった。このことは、森鷗外の「沈黙の塔」抜きには考え

られない。「難解」と「無理解」と「誤解」、また、「閑却」と「黙殺」と「抹殺」、これらすべてが異文化（キリスト教）社会の「人間たち」を抹殺し、ディオニュソスの精神の精髓たる Untergang を骨抜きにして「没落」を贗造した“共犯者”たちである。そうすることによって、ツァラトゥストラとイエス・キリストをまとめて葬ったのみならず、ギリシャ神話とヨーロッパ文学をも根底において拒絶したことにもなる。昭和に入り、作家たちが、たいした抵抗もせずに軍国主義に屈した遠因は、まさにそこにあるのではないだろうか。

### 註釈

- (1) 新潮社版。
- (2) P335. ちくま学芸文庫。
- (3) 高山樗牛は、三部「古い石板と新しい石板」にこだわっていたようである。
- (4) 1921年登張竹風訳『如是経序品 光炎菩薩大師子吼経』(星文館書店)に依る。
- (5) 1935年竹風訳『如是説法 ツァラトゥストラ』(山本書店)に依る。
- (6) 新潮社版。
- (7) 1911年3月春陽堂。長江の全訳出版(1月)直後である。何らかの反響とみなすことができる。
- (8) 一部〈自己克服〉。
- (9) 日本評論社版 ニーチェ全集第七巻
- (10) 『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』より・西尾幹二著「この九十年の展開」P527 1982年白水社。
- (11) 『独和对訳ツァラトゥストラ如是説』第一編(精華書院)。
- (12) 魯迅論集編集委員会編『魯迅研究の現在』P32 1992年 汲古書院。
- (13) (12)のP34。
- (14) (10)のP458。

- (15) 北京魯迅博物館編『魯迅訳文全集・第八巻 P76 福建教育出版社 2008年
- (16) T. Common 英訳を中心とした重訳。貴州人民出版社 2004年(1931年5月発表時の出版元が同一であるかは不明)。
- (17) P22。
- (18) P95。
- (19) (15)のP140~155
- (20) 『魯迅選集第八巻』P76 1956年 岩波書店。
- (21) 『同第十巻』P47。
- (22) 同P194。
- (23) 同P209。
- (24) 三部〈旅人〉。
- (25) (10)のP406(1911年訳)
- (26) 文庫本『ツァラトゥストラかく語りき』(上)P12 1953年 新潮社。
- (27) 文庫本『ツァラトゥストラはこう言った』(上)P10 岩波書店
- (28) 文庫本『ツァラトゥストラ』P12 中央公論社。
- (29) 「ツァラトゥストラはこう語った」(『ニーチェ全集第一巻・Ⅱ期』P12 白水社
- (30) (28)のP533
- (31) P591 1995 弘文堂。
- (32) 吉沢伝三郎訳文庫本『ツァラトゥストラ』(上)P276の訳註。1993年 筑摩書房。
- (33) (9)現代語表記に改めた。
- (34) 三部〈古い石板と新しい石板6〉
- (A) Kröner Taschenausgabe Band75 *Also Sprach Zarathustra*
- (B) かつて朝鮮半島は日本の一部(1910~1945)だったこともあって、「没落」の伝染を防ぐのは困難であったと思われる。高乗權<sup>コヒョンゴン</sup>のハングル訳だけしか見てないが[몰락<sup>ムラツ</sup>ムラツ](没落)となっていた。尚、この訳者は経済学が守備範囲の社会学者のようである。
- (C) 一部〈隣人愛〉